

都島だより

発行責任者  
上田 英雄

〒143-0015  
東京都大田区大森西7-8-25  
TEL 03-3731-0812



関東浪速工業会 会報 2006年(平成18年)11月 第34号

事務局 馬江 治喜

〒234-0056  
横浜市港南区野庭町696-6  
TEL045-841-8885  
E-mail umae2@m3.dion.ne.jp

題字デザイン 岡田宏三

NEWS34号

関東浪速工業会・現在会員数◆合計586名

◆M・機械119名、ME・機械電気25名◆A・建築106名◆E・電気・電子工学181名◆C・土木・都市工学55名◆CI・工業化学・理数62名◆L・普通12名◆工専26名



2007.1.27

平成18年度  
総会のご案内

関東浪速工業会、今年度の総会を左記の通り開催いたしますので、ご多忙中のことと思えますが、万障お繰り合わせの上ぜひご参集ください。

●日時 平成19年1月27日(土) 17時~20時30分  
●場所 鳩山会館・大広間

TEL:03-5976-2800  
文京区音羽1-7-1

●親睦会費 8,000円(女性会員は4,000円)フリードリンク制  
●平成年度卒業会員は無料!

●同封の返信はがきに出欠を「記入の上必ず投函して下さい。」

申込締切は平成19年1月10日です

ご好評により、本年度も前回に引き続き「鳩山会館」の大広間を貸切にて、総会・懇親会を行う企画といたしました。同級生等お誘い合わせの上多数のご参加をお待ちしております!

会場への坂道が少々急ですので、各自負担で最寄駅よりタクシー乗り合いを実施したいと思います。ご希望の方は事務局・馬江までご連絡お願いいたします



昨年度の総会

事務局より

文京区・音羽

鳩山会館

にて開催



東京メトロ・有楽町線 江戸川橋駅1a出口 徒歩5分  
護国寺駅 5番出口 徒歩7分

抽選会開催  
空方ジなし!

女性会員様へのお願い!  
当日の御履物は床面の保護のためハイヒールはご遠慮ください。

昨年度の総会御出席者

来賓	森田靖治郎 理事長 岩地 広報部長 秋山謙三 学校長
機械科 機械電気科 7名	M26 上田英雄 M28 橋本健治 M36 西村 功 ME37 川原敏男 M42 前田範行 M42 山口忠雄 清水一三雄 先生
建築科 普通科 10名	A25 西阪 勲 A28 岡田宏三 A28 酒井 保 A28 森田幸博 A37 越田 勝 A37 森 芳信 A38 岩井浩一 A44 水守恵子 A45 田辺孝次 A57 信原利行
電気科 12名	E13 加藤利夫 E18 平野榮一 E20 眞鍋静夫 E29 平松 功 E35 芳仲 宏 E36 赤尾仁史 E36 石垣英明 E36 佐治博司 E36 竹村繁幸 E36 細川 俊 E36 馬江治喜 E37 岡本義輝
土木科 7名	C18 大蔵 馨 C18 秋月勝美 C18 北里直行 C20 榎本嘉信 C24 土谷 颯 C33 明見和彦 C33 松本信行
工業化学科 3名	C132 松井駒治 C134 柴田孝次 C140 菅家亘通
合計 39名+来賓3名でした	

母校創立100周年記念  
東西合同懇親会について

母校一〇〇周年記念行事の一環として、東西合同懇親会を左記のように開催されます。この機会に東西同級生の方々と連絡しあって、久しぶりの再会というのはいかががでしょうか。実施日 平成19年3月10日(土)~11日(日) 行き先 愛知県蒲郡市 三谷温泉(平野屋) 関東地区として大型バス1台を予定 費用・申込期限については現在未定です。 決定次第お知らせいたします。

申込先 事務局 馬江まで

MニュースのEメール  
での受信にご協力を

Eメールで受信して頂きますと記事中の写真がカラーで御覧になれます。(A4サイズ4頁で約1.6MB程度のデータ量となります) 経費節減(A4サイズ4頁のプリント代、送料)と発送事務省力化のためパソコンメールアドレス(携帯は不可)をお持ちの方、御協力よろしく御願致します。御協力頂けます方は、左

記事事務局宛メールアドレスをお知らせ下さい。事務局メールアドレス

umae2@m3.dion.ne.jp



# 夏の見学会報告

E36 馬江 治喜

今回の見学会はM科36卒の西村氏のご協力を得て、7月22日横浜MM21地区にある、三菱みなとみらい技術館の見学会を開催致しました。梅雨明けが遅れ、蒸し暑い天候の中、左記8名の方々が参加して頂きました。三菱みなとみらい技術館は、三菱グループの中核であり日本を代表する三菱重工業が過去から現代まで其の当時の最新鋭の作品を模型で展示されていて、日本の科学の発展、歴史が一望できる内容でした。特に宇宙ロケットのエンジンの実物大模型は技術の進歩をうかがう事ができました。最後に3次元の宇宙旅行をスクリーン映像で体験し、二時間ほどの館内見学を終了しました。今回の見学会にご協力頂きました西村様に参加者一同深く感謝申し上げます。有難うございました。



参加者(8名)  
E13加藤、M14松原、M26上田、A28酒井、  
E29川村、C33松本、M36西村、E36馬江

三菱みなとみらい技術館



## 第9回 桂米左独演会

A37 森 芳信

桂米左(A59卒 木村 佳氏)独演会が10月13日(金)千代田区立内幸町ホールにて開催されました。氏の東京公演は今回で9年目となり、会場も昨年までの「お江戸日本橋亭」から内幸町ホールへと変わり、関東浪速工業会からは御夫婦及び友人、知人同伴の方々を含

め例年の2倍余りの31人が、一段と磨きのかかった氏の嘶に耳を傾けてきました。演題は「どららの幸助」「文笛」の二席、助演に林家正蔵師匠の一番弟子の林家たけ平、前座を米朝一門の桂二乗の二氏という内容でした。

独演会後日、桂米左氏より「私の独演会に関東浪速工業会の皆様に多大な御協力を頂き心より感謝致しております。皆様方に何卒宜しくお伝え下さい」との礼状を頂戴致しました事を記して報告に代えさせていただきます。



## 海上自衛隊観艦式 (予行)参加報告

E36 赤尾 仁史

日時・平成18年10月25日(水)12時12分〜13時40分、場所・駿河湾海域

このような大掛かりで、すばらしいイベントが行われていることを全く知りませんでした。参加して感動を得たのでお知らせ致します。百聞は一見にしかずで、ほとんど文章では伝わらないと思いますが、皆様も一度参加することをお勧めします。今回のような航行による観艦式は、前回は平成15年に行われ、数年に一度しか行われません。乗艦する切符の入手は大変難しく、海自のホームページでチェックし、早く申込みねばなりません。小生は、E49卒の高橋さん(空自一佐)の計らいで乗艦の切符を手で運ぶことができました。本番は10月29日に内閣総理大臣が、観艦艦「くらま」に乗船して行われます。本日はその予行

で、本番と同じに行われ、一般市民も多数参加しました。

小生は、掃海母艦「うらが」5650総トンに、海上自衛隊横須賀船越岸壁から乗艦。午前8時45分に出航。相模湾海域まで航行。朝小雨が降っていたが航行に入ると薄日も差し、波高1〜1.5mくらいで穏やかな航海となった。日ごろの行いの賜物か。

今回は警戒艦を含め48隻の参加。航空機は警戒艦を含め50機の参加である。

観閲部隊の艦艇は先導艦「いかづち」を先頭に総理大臣が乗船する観閲艦「くらま」の後にイージス艦「ちようかい」など、7隻の隊列。(イージス艦は「ちようかい」1隻の参加。他は日本海に展開か?イージス艦のレーダーを正規に相模湾で動作させると羽田の離発着が出来なくなるとのこと。それ位強力な電波らしい)それに平行して、支援部隊が7隻。正面に天城連山、右手に富士山、左手に大島を見て2列の隊列を組んで航行。

その間を受閲艦艇部隊が旗艦「たちかぜ」を先頭に潜水艦部隊、ミサイル艦部隊を含め24隻が正面から航行する。海自は時間に正確で、観艦式開始予定の12時12分に「たちかぜ」が観閲艦「くらま」の前を通過した。

航空機も指揮官機(P3)を先頭に28機が上空を滑空する。これだけの艦艇が一同に集まったの航行は圧巻である。その後、帰港に向けて7隻づつの2列縦隊の船団が500m位の直径で急旋回する。これも観艦式以外では見られない光景である。ユーターンしたところで、今度は、展示航行・飛行が行われる。第一群は「さわかせ」「あさかせ」「しまかせ」による5インチ砲祝砲各々4発。続いて、第二群「ゆうばり」「ゆうべつ」「いしかり」ポ・フォーエス発射各々4発。第三群ヘリコプターの発艦「たかなみ」「おこなみ」「むらさめ」。第四群潜水艦の急潜行・急浮上・やえしお「わかしお」「なつしお」「ゆきしお」。第五群洋上補給と「きわ

「はるさめ」「やまゆき」。第六群ミサイル艦3隻の高速航行。第七群LCA C(上陸艇ホークラフト)2隻の高速航行。その他化学消火艇による放水煙幕、IRフレア発射。続いて第一群航空機P-3C・2機から対潜爆弾投下各々4発。第二群P-3C・2機、IRフレア発射各々4発。第三群US-1・2機救助艇の着水・離水が行われた。ポ・フォーエスや対潜爆弾等は、着水してから爆発し、大きな水柱が上がり、その音とともに大迫力である。潜水艦の急浮上は、鯨の浮上のように頭からドンと出てくる。海上ではさほど離れているとは思えない感覚であったが、実際には1km以上は離れているらしく、光や煙、水柱の後で、音が迫力を持って聞こえてくる。

帰路は35km/hでの航行で艦の前方では、20m以上の風と霧雨のような水しぶきがかかり、長くは立っていられず、艦後方に回ると風もなく穏やかでした。参加市民は、老若男女さまざまで、息子さんが潜水艦に乗っているという仙台から来たお母さんもいました。「潜水艦に乗ると携帯も通じない」と愚痴っているとの事でしたが、そりやそうだ。潜水艦にはドコモもソフトバンクも入っていない。小生の乗った「うらわ」にはプラスバンドが乗っかっていて、帰路には演奏のサービスが有りました。最後の演奏は、なぜか「兄弟舟」であった。私は、よく見える中甲板の前に陣取っていたので乗船してから式が終わる2時間までの5時間あまりの立ちっぱなしでした。腰に持病がある人は無理かもしれませんが、無理をしても一見の価値があります。

16時00分、船越岸壁に帰港。皆さん、ぜひ一度体験してください。



母校空襲罹災の記 (昭和二十五年六月七日) 四十四年見の役者より抄録



M21 金田 龍之介

M21 入部号からの続き

まだ不発弾でも残っていて、いつドカンと来るかもしれない。熱気で出る涙をじつとこらえ、いがらっぽい喉の奥の不快感で時々つばを吐いた。道の両側は、家であった木材が焼け落ちて、ちよろちよろ燃え続けていた。

我が家は完全に燃え尽きて、玄関の前にある、人造石の門柱だけであった。かわらが白つちやけ、全体が変わり果てた姿で静まり返っていた。家の前でカーキ色の戦闘帽に、カーキ色の学生服を着てゲートルを巻き、かぼんを肩からさげた中学生がうつぶせに倒れていた。とたんに弟ではないかと思つて、思わず抱き起こしてみたが、そうではなかった。顔に焼けこげが二、三カ所に出ている。数時間前の猛炎に、ここを通つて巻き込まれ絶命したのであろう。その小さななきがらに合掌して、もとの道を引き返した。福田君とは別れた。(そのときから三十二年たつて、昭和五十二年十一月に大阪の朝日座で「男たちの虹」という芝居を上演している時、ひよっこり楽屋に顔を出してくれた。)高倉橋の上に、知覚、川本と三人でぼんやりたらずんである、父が来た。日ごろはわりあい元氣な、酒に酔うと太った腹を出して、「黒田節」を歌うのが得意な父であったが、この日、都島本通りから歩いてきた父は、がっくりして、疲れきつて、こんなに力の抜けた父を見たのは初めてであった。川本和男が都島工業で、もらつて来たにぎり飯を出したら、父は「おっ……」と小さく言つて、受け取り、橋の石の手すりに身体をもたせかけて、黙つて食べ始めた。そのときの父の年齢は四十七歳であった。父はこの日、大阪駅で空襲にあった。

そのうちに妹が「にいちちゃん」と声をかけて現れた。動員先から友人と帰つて来たので

あった。腕章をまき、モンペ姿に女学生服でかばんをさげ、防空頭巾もさげていた。髪は真ん中から分けて両側で短く束ね、服はすずけて泣いたように煙のあとが横に走つていて、日頃はわりあい無口な目立たない感じであまり笑つたりなんかしない妹であったが、この時は心細かつたのであろうか、ニコニコ笑つた。あとは弟と母だ。焼け跡に雨が降り出した。あたりは時間より早く夜がせまり始めた。ここでぼんやりしていても仕方ないので、学校へ行こうという事になって、みんな引返しした。その夜はたぐさんの罹災者と共に、ごくわずかのロウソクの薄明かりをたよりに焼け残つた本館の教室までたどり着き、父も妹も仮眠した。私たちは、眠る気持ちにもならず、ぼんやりと校庭に出て、六月の爽やかな朝の、生駒山の峰の白むまで、起きていた。雨は夜半すぎには上がつていった。

翌日焼け跡に、母と弟がいた。「やあ」と言つて、笑つただけで余りしゃべる事がなかった。言葉なんかなかった。みんな無事で生きていて良かったなあ、と思つたのは、もつと後になつてからだった。母はこの時、三十九歳であった。父や私達が出かけて一人になつた時、警戒警報が出てその後、午前九時十二分に空襲警報になった。どんどん焼夷弾が落ち始め、もう駄目だと思つて家を出て、リュックサックをかついで野江の方に逃げたが、BSFが、石油をまいて、その上に焼夷弾を落とす始めた。母はとうとうリュックサックを捨てた。母が、空の明るい方明るい方を目指して歩いてゆくと、弟が友人と笑いながら歩いて来た。母は「富士彦！」と叫ぶと気がついて、母の方へターツと走つて来た。母と弟は八軒先きの守口の学校まで歩いて行き一夜を明かした。家の近所の年寄り、小さな孫五、六人を乳母車に積んで、その学校まで逃げて来ているのを見つけては母は「おばあちゃん、大変だったねえ」と声をかけた。父の次姉が探しに行つて「金田の千代さんはおらんかね」とだいて

大声で呼んでくれたらしいが母たちとは逢わなかった。そして一夜明け、焼け跡で家族は再会した。徐々にはあるが「無事であった。生きていた」という実感を味わつた。幸福を喜んだが、住む家が灰燼に帰したという実感の方は、誰もが余り急すぎて、麻痺してしまつたのか、なんとも思わず、むしろ楽天的な雰囲気すら家族の間に湧いてきつた。大丸へ行つて担任の井上勘右衛門という教師に「家が罹災しました」と、報告したら、その教師は「君とこ、焼けたんか、へえ」と言つた。あまり簡単だったので私も思わずニコニコして「ハア」といった。「ああ、そうか、そらそら」と言い返して来た。この当時は「今日は他人が身、明日は我が身」の時代だ。たしかに「ああ、そらそら」としか言いがなかつたのであろう。父と母が相談し、罹災証明書ももらつて、父の知人を頼つて岡山へ行くことになつた。二日ほど都島工業で過ごし、あと二日を高倉国民学校で過ごした後であった。高倉国民学校の校庭には、一屯爆弾でできた大きな穴が開いていた。家の焼け跡から母が掘り出して来たミシンの胴体を私がかつた。高倉三丁目から桜ノ宮の省線の駅まで歩き、大阪駅に行くのだ。岡山へ行つた時は、焼けていない街を珍らしい物でも見るような眼で見た。岡山城も、鳥城の名の通り、黒い姿を旭川のほとりに映し出していた。(その後六月二十九日空襲で消失す)父の知人の紹介で、西古松大元町に空き部屋を借りた。母が鍋釜を揃えた。やつと一室に身を横たえた時は、何ともいへぬ安心感があった。お米をわけてもらつて来て母がえんどうご飯を炊いた。妹と弟はそのまま岡山に残り、私だけ勤労動員に行くので、大阪へ帰つて来た。満員の汽車で大阪駅に着き、プラットホームに立った時、「あ、俺の帰る家はもうあらへんねんな！」と思つた。その時はじめて、焼け出された罹災者の心細さを味わつたのであった。

www.geocities.jp/kinryu\_doozi/

観劇会報告

E36 馬江 治喜

平成18年10月7日(土)東京明治座にて金田龍之介氏の「黒革の手帳」(米倉涼子主演)へ関東浪速工業会会員有志による観劇会を開催いたしました。

原作は松本清張で、既に本、TV等で公開されていますので筋書きはご存知の方も多いことと思います。米倉涼子さんの衣装が見ものど話題になっていました。しかし何といても金田龍之介氏の演技が見ものです。金田氏は2幕より出演され、大変渋い演技で物語の全体をぐつと引き締めておられました。公演終了後楽屋へ激励に伺い、自己紹介や思い出話などに花が咲き最後に記念写真を撮つて解散となりました。左記参加者の佐々江様は、以前関東浪速工業会で大いに御尽力頂いた方で、関西より駆けつけて頂きました。



参加者(11名) C18秋月、A28酒井、E28有井2名、C132佐々江2名、C33松本2名、M36西村、E36馬江2名

青葢会活動報告

①表参道建築ウォッチング

A57 信原 利行

各科たより

平成18年9月9日(土) 青葢会のイベントとして「表参道建築ウォッチング」を開催しました。建築科だけではなく他科からも参加いただき、表参道界隈を散策しつつ、話題の建築の見学を行いました。見学した建物はカルティエ↓プラダ↓ティクト↓トッズ↓参道ビル↓ルイヴィトン↓ディオール↓

(3面より続き)

ジ・アイスバーグ↓最後は表参道ヒルズでした。夕方は原宿の梅酒バーにて建築の感想を話し合いながら楽しい懇親会の時間を過ごす事が出来ました。



参加者(7名)  
M26上田、M28橋本、A25西阪、A27清井、  
A28酒井、A37森、A57信原



表参道ヒルズ ジ・アイスバーグ プラダティック

## ②陶芸会

平成18年9月30日(土) 青葺会恒例のイベントで、陶芸家として活躍中のA46卒・柚木寿雄氏の国立自遊工房にて行いました。他科からも3名参加をいただき、午後の数時間ですが陶芸に没頭することが出来ました。作品は工房で施釉焼成され、12月に再度集合し品評会を行う予定です。



参加者(7名)  
E36馬江、E36竹村、C140菅家、A28酒井  
A28森田、A37森、A38岩井、57信原  
写真中央がA46柚木寿雄氏

## シルク・ロード 天山北路を往く(第1回)

A27 田中 瑛也



シルク・ロード  
はじめに シルク・ロードは、西のローマ、東の長安を結ぶ通商路であることは、周知のことであるが、西欧の貴婦人が身にまとう衣類の材料に欠かせぬ絹、中国を主産地とする

この品を、シルク・ロードを駱駝の隊商によって運ばれ、身につけるまで幾人かの販路での手を経て、仕立てられ高価な品となった。かように東西交易の通商路は、絹をもって名に冠せられているが、物質面からのこの道の東西交流に果たした益のみならず、精神面から今日の東アジアの人々の存在に欠かすことが、出来ない支柱の役割を果たした点に視点を投げかけ、シルク・ロードの東の玄関口を彷彿した思い出を綴る。

### ●修行で創る芸術画像

莫高窟(写真1) 敦煌市の南東25km、鳴沙山の山腹に開削した、あるいは自然の洞窟を改修して莫高窟と名付けられた石窟群は、AD366年に当地の修行僧楽伝が山肌を開削したのを、祖とする。悠久の歴史を持つ中国は、四方を異民族に包囲されている地理的条件によって、絶えず異民族の自国への侵略に対する防衛、と同時に自国民が持つ領土拡張への野望とで、歴史の大半を戦乱の史を以て費やした。シルク・ロードの地では、西北異民族、ウイグル、匈奴、大宛、大月氏国等多民族との抗争が繰り返された。熱心な仏教徒は、市中に仏寺を建立し仏像を安置し、仏門に入りて仏に帰依することを願ったが、度重なる戦乱で寺は焼き壊されて、誓願は果たされなかった。そこで僧達は、山を開削し窟に入りて菩提心をもって壁面には、この世ならぬ極楽浄土、釈迦の前世譚、仏の御姿等を描き、室内空間には、粘土による塑像を制作して安置して、人々への安心立命を願った。我が国の文豪夏目漱石の門下生で、久米正雄の名作「破船」に登場する主人公のモデルといわれる松岡譲が著した「敦煌物語」などの著作を通じてかすかに日本人の心の中に莫高窟の中に描かれた壁画は、飛鳥法隆寺壁画のルーツであるとの思いを秘めていた。今シルク・ロードへの観光ブームで、世に莫高窟は世界遺産の登録もされ、脚光を浴びる。この窟が有す

る石室の数は、735室の多くを数える。4世紀後半から壁画は描き始められ、北魏、随、唐、五代、元と描き続けられた。壁画が描かれた石室の規模は、長さ1.8kmの範囲、壁画の総面積約4万5千㎡、塑像は2千体を数える。修行僧が、仏に祈る心を筆に託して創作した壁画だけに、内部に入ると現世の悪に汚された心も、次第次第に清浄心に純化される思いに浸る。印象に残る壁画は枚挙に暇がないが、とりわけ第130窟に安置された高さ22.5mの大仏、15mの脇侍の菩薩像、天井に描かれた飛天の舞姿は、三次元芸術と二次元芸術との見事なコラボレーションが感じられる。ついで57窟の菩薩像のアルカイックスマイルの和やかな笑み、画家平山郁夫氏推奨の壁画、275窟の交脚弥勒菩薩との出会い、思わず稽首、頭を垂れさせるようなうさぎを感じさせる。他にも心に残る壁画、塑像はあるが、書き尽くすには紙面が足りないので割愛する。ただ石窟内は、撮影禁止、スライド等も販売しておらず、見る人の心に御仏の御像を刻めとの仏教根本の教えなのか。販売されている写真集にも、石室の全ての壁画は網羅されていない。その要因は、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、中国政府の国力衰退期に乘じて、未知なる土地シルク・ロードへの探検隊をヨーロッパ先進諸国が組み、壁画をはぎ取り、塑像を略奪し持ち去った苦い歴史の体験が、壁画を鑑賞する人々に対しての厳しい態度となった。無論壁画の保存への配慮も考えてのことであろう。一般に公開されている石室は、40室に過ぎないとは如実に現実を示す。「沙漠の大画廊」と呼ばれるのに相応しい莫高窟も石窟中央に築かれた九層楼外観の写真を納めて寂しく立ち去る。

格段に小さい。赤い粘土で赤裸々な容姿の火焰山の山中に開削された。当地に定住した鞠氏高昌国の国王は、敬虔な仏教徒でこの石室を設けて、仏への祈りの場とした。以後高昌国滅亡後も支配者は、唐、五代、十国、宋、元と替わったが、窟の壁画は描き続けられた。莫高窟と比べて、中国の国勢に陰りを見せた時代、イスラム教徒の侵略により偶像崇拜禁止の彼等は、この窟に入り壁面の仏顔をそぎ落とした。かてて加えて十九世紀後半から前世紀前半にかけて著名なイギリスのシルク・ロード研究家スタインをはじめとして、研究者は、壁画をはぎ取り本国に持ち帰った。当地の壁画も今日大英博物館で対面出来る。石室に入っても壁面にのこる微かな痕跡で荘嚴な仏顔に思いをはせるしかない。石室とはいえ泥岩で劣化も甚だしい。この泥岩で構成された仏への祈りの場の感覚は、木の香薫る我が国の名刹を訪れた時に受けた思いとの間に起きる違和感は大い。高天なシルク・ロードの地に未だ眠る石窟、現在開放されていない石窟も数多く存在する。それにしても夏は高温多湿、冬は厳寒と最悪の気候条件の下、無心に仏に帰依して、筆を持って壁画を描き、鑿を使って塑像を制作した高僧達の篤い信仰心にはただ頭を垂れるだけである。



写真1



写真2

**訃報**

E9 藤村 一男氏  
平成18年3月1日

M16 軒原 榮三氏  
平成18年4月14日

工専C24 遠藤 素文氏  
ご家族よりお葉書

L27 堀口 孝子氏  
数年前にご逝去

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

次号の  
Mニュースは平成19年5月  
発行予定です